

第4回：メキシコの大地との出会い

矢原，徹一

九州大学大学院理学研究院：教授 | 九州大学持続可能な社会のための決断科学センター：センター長

<https://doi.org/10.15017/1917855>

出版情報：決断科学. 4, pp.141-147, 2018-03-23. 九州大学持続可能な社会のための決断科学センター
バージョン：
権利関係：



第4回

メキシコの大地との出会い

矢原徹一

多くの日本人にとって、メキシコは遠い国だ。私もメキシコに行ってみるまでは、その自然・歴史・文化についての知識はほぼ皆無だった。そのメキシコになぜ行こうと考えたのか、まずはその理由から話を始めよう。

前回の記事で紹介したように、私は無性生殖をするヒヨドリバナ属植物の研究のために、北米東部（フロリダ州など）に調査に出かけた。この調査を通じて、人口甘味料の原料として有名なステビアがヒヨドリバナ属の親戚であり、メキシコには約100種のステビアが生育しており、そしてなんとそのうち30種以上に無性生殖が報告されていることを知った。無性生殖植物の進化を研究している者として、何としてもメキシコに出かけて、ステビア属の調査をしてみたいと思うようになった。

しかし、当時の私はスペイン語をまったく話せなかった。メキシコには友人もいない。治安が悪いという話も聞く。そもそも、ステビア属がどんなところに生えていて、どんな調査が可能なのか、想像もつかない。まずはステビア属についての情報収集が必要だ。そこで調べ始めてみると、メキシコ国境に接するテキサス州ビッグベン（Big Bend）国立公園に行けば、ステビア属が1種だけ自生していることがわかった。すぐにテキサス

調査を計画し、実行に移した。

ビッグベン国立公園に行くために、テキサス州のサン・アントニオでレンタカーを借り、ハイウェイを車で飛ばし、国立公園の登山口があるアルパインという街をめざした。西部劇に登場する、サボテンが生えたあの荒野の風景の中を、ただひたすら北上した。

私は大学時代に西部劇の音楽に興味を持ち、レコードを買ってよく聞いていた。このため、荒野の中を運転していると、「荒野の用心棒」や「夕陽のガンマン」のメロディが自然と浮かんできた。口笛が心に響く名曲だ。西部の荒野には、なぜか口笛がよく似合う。最初はこれらのメロディを脳内で再生しながら、エキサイティングなドライブを楽しんだ。しかし、テキサスは広い。そのニックネームは、the biggest state。サン・アントニオからアルパインまで約 500km だから、半日かけての移動となる。これでもか、これでもかと続く荒野の風景は、さすがに飽きてくる。「アルパイン」に近づけば、きっと風景に変化が出るだろうと予想し、その変化を待ち望みながら、運転を続けた。しかし、いつまでたっても風景は変わらない。「アルパイン」は高山という意味だから、きっと標高が高い場所にあるのだろうと思った私が愚かだった。今なら、Google Earth でどんな場所かすぐに確かめることができる。「アルパイン」の街の標高は 100 m 台だ。

アルパインからビッグベン国立公園登山口に向かう道に入ると、さすがに少し風景が変化する。次第に道路が傾斜を強め、山に近づいていることが実感できる。登山口にあるチソス・マウンテン・ロッジは、約 1300m の標高にあった。周囲は灌木が点在する岩砂漠だが、灌木の木陰にはムラサキカッコウアザミに似たキク科植物の鮮やかなブルーの花が咲いていた。翌日は標高 2385 m のエモリー・ピークをめざした。ホテルの人から、結構時間がかかるがおまえはグッド・ハイカーかと尋ねられ、イエスと即答した。こっちは屋久島の山を歩いているんだよ、と自信がみなぎる。予想どおり、山頂近くまで苦もなくたどりついた。目的のステビアは、明るい道端に少しだけ生えていた。白い花の種で、見栄えはぱっとしないが、たしかにヒヨドリバナの仲間の形をしている。異国の地で懐かし

い友達に会うような、格別の親しみを感じた。

目的は達したが、山頂に立たずに帰るわけにはいかない。岩山をさらに登った。山頂部でも植生はまばらで、森林と呼べるものはない。その明るい光景の中で目立つのは、圧倒的な存在感を持つリュウゼツランだ。長さ1m近い巨大な多肉質の葉を地上に広げ、5mくらいの花茎をあげ、大きな黄色い花をつけている。日本でも北米東部でもまったく見たことがない、初めての光景だ。

そして、リュウゼツランが咲く岩山の見晴らしが開けると、国境を流れるリオ・グランデ川の向こうに、わが目を疑う光景が飛び込んできた。地平線まで、見渡す限りの大森林地帯が広がっていたのだ。メキシコもテキサスと同様に砂漠とサボテンの国とばかり思っていた。実際には、メキシコ北部には3000m級の山脈がつらなり、針葉樹林が山脈を覆っている。次はメキシコに行くぞ！眼下に広がる大森林地帯を見ながら、その決心を固めた。

そのときはまだ、このビッグベン国立公園を含むテキサス州の一部が、旧メキシコ領であり、アメリカ合衆国がメキシコとの戦争に勝って手に入れた土地であることを知らずにいた。そういえば、レンタカーを借りたサン・アントニオはスペイン風の名前であり、街なみにもスペイン統治時代の面影があった。

オアハカへの旅

メキシコへの旅を助けてくれる人物が、やがてあらわれた。京都大学で学位をとった日系メキシコ人のケン・オオヤマさんだ。東大駒場（当時）の私の研究室にポスドクとして来てくださったのだ。彼がメキシコ国立自治大学に職を得て帰国されたので、早速メキシコ調査を計画し、友人の伊藤元己さん（現東大教授）に同行をお願いし、メキシコシティからオアハカへの一週間ほどの旅を実行した。私はオオヤマさんがフィールドにも同行してくださるものと思っていたのだが、メキシコシティの南端で、あとは自力で行って来てねと、放り出されてしまった。オアハカ行きの夜行バ

スが盗賊におそわれて日本人が殺されるという事件があった年のことである。初めてのメキシコ調査は、緊張感マックスでスタートした。

急いで覚えた片言のスペイン語がどれだけ通じるか心配だったが、レストランで料理を注文する、ガソリネラで給油する、オテルで部屋をとる、メルカードで買い物をする、という程度の会話は何とかできた。困ったのは、道を聞いたあとだ。道を聞くことはできても、詳しい説明をされると、さっぱりわからない。ただし、幸いにしてメキシコの人はいたい大雑把で、デレッチョ（まっすぐ）でおしまいだ。目的地までの時間を聞くと、近ければウノ・オーラ（一時間）、遠ければトレス・オーラス（三時間）。ウノと言われて一時間運転し、もういちど聞くと、またウノと言われることもしばしばだった。

調査は乾季だった。ケン・オオヤマさんはハイウェイではなく一般道を紹介してくれた。そのほうが植物採集のための路肩駐車が楽なので正解ではあったのだが、車が巻き上げるほこりの中の運転が続いた。田舎道に入ると、しばしばスコップを持った子供と老人が紐で道路をさえぎっていた。道路を見ると、穴を埋めたあとがある。道路をメンテしてるからと言って、通行料を請求された。このため、いつも小銭を絶やさないように注意した。

メキシコシティの標高はおよそ 2250 m。メキシコシティから南下してプエブラ市に行く道は、3000m 近くの峠をこえる。道路が山に入ると、道路沿いには立派なカシ林があらわれ、標高があがるとモミ林に変わる。私の中でメキシコのイメージががらりと変わった。明るいカシ林の下には、ステビアの群落がどこにもあった。一箇所は何種ものステビアが入り乱れており、すさまじく変異性が高く、とても面白い。花色も白、ピンク、濃い紫とさまざま、見飽きない。しばらく走っては車を停めてステビアを採集する旅を続けた。ステビア以外にも、マリーゴールドの黄色、コスモスのピンク、ダリヤの紫や朱色、サルビアの赤や青の花が咲き乱れている。道端がお花畑だ。その後世界各地をまわったが、メキシコの植生はまちがいなく、世界一カラフルで美しい。

峠をこえてプエブラ市に下る道からは、メキシコシティの南にそびえ

るポポカテペトル山とイスタシワトル山が見える。それぞれ、5426mと5286 mの標高を誇る。もちろん山頂部は万年雪に覆われている。砂漠から雪山を見上げる経験ははじめてだ。メキシコの大地のスケールの大きさを感じながら、プエブラ市を走り抜けた。

プエブラ市からテワカンに至る道は、砂漠を抜けて続く。テキサス州を北上したときよりもさらに平坦で、さらに植生が乏しい道を200kmほどひたすら南東に走り、プエブラ州南東部のテワカンにたどりつくと、ようやく少し岩山が見えた。もう少しでオアハカ州だ。その日はテワカンで一泊し、一日の無事を祝ってコロナとテキーラを飲んだ。メキシコでもっともポピュラーなビールであるコロナは、リモーンを絞り込んで飲むとうまい。一日の疲れが吹き飛ぶ。リュウゼツランの葉の基部に蓄えられたデンプンから作るテキーラは、日本のどの焼酎とも違う独特のキレがあり、一口飲んだだけで喉にツーンと染み渡る。飲みすぎは禁物だ。

オアハカ州に入ると、地形は起伏を増し、岩山に爪楊枝を立てたようにサボテンが生えている。やがてカシ林があらわれ、ステビアが出迎えてくれた。メキシコシティからプエブラに越える道で見たものとは違う種が次々にあらわれ、興奮した。このオアハカ旅行をきっかけに、私はほぼ10年間、毎年メキシコを訪問して、ステビアの調査をすることになった。このステビアの研究では、昨年ようやく分子系統学的研究の成果を論文にできたが、まだまだやりたいことが残っている。

オアハカ州の州都、オアハカシティは世界文化遺産に登録された街だ。かつてはアステカ帝国の都市として栄えたが、1521年にスペイン軍に征服された。その後16～18世紀のスペイン統治時代に作られたコロンIAL様式の美しい街並が残る。ソカロ（中央広場）の近くにあるサント・ドミンゴ教会はとくに有名だが、それ以外にも歴史的建造物がたくさんある。

食事も豊かだ。手で裂けるチーズ、ケシージョはオアハカの特産品だ。塩味が効いていておいしい。その後日本ではこのチーズをまねたストリング・チーズが発売されたが、その味はオアハカのケシージョに遠く及ばない。メキシコにはモーレという鶏肉にかけるこげ茶色のソースがあるが、オアハカのモーレはその独特の色から、アマリージョ（黄色）と呼ばれる。

クミン、コリアンダーというカレー風味の代表的スパイスに加えて、イエ
ルバ・サンタというムラサキ科のスパイスを使う。もちろん、チレ（とう
がらし）を何種類も使うので、辛いけど、おいしい。メキシコの主食であ
るトルティージャ（トウモロコシのデンプン粉をうすくのはして焼いたも
の）の作り方も味も独特で、つい食べ過ぎてしまう。

夕食のあと、オアハカの音楽のCDはないかと店を探しているうちに、
El Cóndor Pasa（邦題：コンドルは飛んでいく）が目にとまった。サイモ
ン＆ガーファンクルがカバーして有名になったが、もともとは南米のヌ
エバ・カンシオン（新しい歌）運動の中で広がったフォルクローレだ。ヌ
エバ・カンシオンは、音楽を通じた社会変革運動として、1960年代以降
にラテンアメリカ各地で大きく盛り上がり、優れた音楽家を育て、数々の
名曲を残した。ケーナやチャランゴなどの民俗楽器で奏でられるフォルク
ローレは、日本人の琴線に触れ、日本でもファンが少なくない。フォルク
ローレを聞くと、アジアから新大陸にわたった人たちの中に、私たちと共
通する音の感覚が今も保たれているのではないかと感じてしまう。

翌日訪問したオアハカのカシ林は、アジアとはまったく違う世界だ。
しかし、たしかにカシ林（どんぐりの林）である。テキサスの荒野とは違
い、日本の温帯林と同様に、ブナ科（どんぐりの仲間）が優先した林であ
る。そしてそこには、ヒヨドリバナの親戚であるステビアがたくさん生え
ている。実はオアハカには、松田英二博士が発見されたウツギ属の種があ
る。ウツギ属は、東アジアとメキシコに隔離分布しているのである。松田
英二博士は、ウツギ以外にも、東アジアとメキシコの関連を示す植物をい
くつも発見された。東アジアとメキシコの植物の間には、過去につながり
があったのだ。

松田英二博士は、1922年にメキシコに渡った植物学者である。第二次
大戦中の苦難を経て1951年にメキシコ国立自治大学教授に招かれ、その
植物園を創った人であることを、オアハカで学んだ。日本から見ればメキ
シコは遠い国だが、メキシコには日本にかかわりがある植物が生えており、
そしてその研究には松田英二博士が大きく貢献されたという歴史がある。
自分がその歴史にめぐりあい、そしてメキシコの植物研究に貢献できる機

会を得たことに、不思議な縁を感じた。この縁が、決断科学プログラムのメキシコ実習につながったことは言うまでもない。

メキシコを旅すると、長い歴史の時間の中に自分が生きていることを実感する。最終氷期の氷河が溶けたあとに、アラスカから北米を通してメキシコにたどりついた人たち。彼らが残した文明には、どこかアジア的な要素が感じられる。そして、このメキシコの植物の中にもアジア的な要素がある。それは、何百万年、何千万年の地球の歴史の中で、東アジアとメキシコに交流があった証だ。その植物の交流の証を、日本人研究者である松田英二博士が発見され、そして私とその研究の歴史を紡いだ。そして、決断科学プログラムのメキシコ実習を通じて日本とメキシコの新しい交流が生まれた。この交流は今や私の手をはなれて、新しい道をたどっているが、私のステビア研究もまだ終わっていない。近い将来、メキシコをもういちど旅して、ステビアの研究を再開できる日を夢見ている。



矢原徹一 やはら てつかず

九州大学教授 持続可能な社会のための決断科学センター長

1954年福岡県生まれ。京大大学院理学部卒。東京大学助手、助教授を経て1994年より九州大学教授。専門は生態学・進化学。著書に『花の性』『保全生態学入門』（共著）ほか。